

---

# 異界嫁日記

とっしー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界嫁日記

### 【Nコード】

N0162W

### 【作者名】

とっしー

### 【あらすじ】

地球と異世界をつなぐゲートから帰還した「おれ」。

ワケあり勇者として召喚された高校生のおれは、とあるチートな秘策を駆使して、ゲート内世界を救おうとしたのだが。

その過程で出会ったゲート内世界のお姫様たちや魔剣士、はたまた地球に帰ってきてからは義妹や女教師が熱いまなざしをおれに向けてきて、さあ大変。

やがてゲートによって二つの世界が恒常的につながったことで、おれの女性関係はさらなる混乱の度を深めてゆくのだった。

VRMMOゲーム的な異世界と現実を行ったり来たりのラブコメ  
デイ!

注意：R15相当のレーティング。

## プロローグ

（イレブンズゲート）

世界各国に異世界と通じる扉が開いたのは3ヶ月前のこと。

アメリカ、イギリス、中国など11の国に、野球場ほどの面積を有する超次元空間が生まれた。

ここ日本にもゲートがある。東京都武蔵野市、都立吉上高校の校庭が丸ごと大ゲートへ空間転移し、もともとあったグラウンドは次元の彼方に吹き飛ばされてしまった。

それはそれは、世界中が大変な騒ぎになったそうだ。

もっとも、その時の様子をおれはこちら側の世界から見ていない。各国の軍隊や警察が厳戒態勢を敷き、マスコミ報道もそのこと一色でテレビも通常番組の放送を休止した。いまま報道番組のなかで、検証番組が繰り返し放送されているのを、おれは自宅にもどってからゆっくりテレビで見せてもらったのだが。

世界中の関心は11ヶ所のゲートに向けられ、その間は紛争中の国家や民族同士も停戦せざるを得なかったほど。人類未曾有の事態は、宇宙人の侵略か、はたまた天変地異の前触れかと世界中の人間を震え上がらせた。

数日が経ち、各ゲートから人間が姿を見せると、その身柄はたちまち各国政府の保護下に置かれた。

11ヶ所のゲートから一人づつの人間が現れたのだが、日本のゲートから出てきたのが、この「おれ」だったというわけだ。

おれの名前は、双葉<sup>ふたば</sup>としあき。一年前に行方不明となり、両親を苦しめた親不孝者だ。ゲートがおれの通う学校の敷地に現れたのは、異世界での役割を終えて故郷に帰る者たちのために、神さまがそれぞれの家路に近い場所を選んでくれたからである。

## 第一章 リリーナ・フォーミュラ・エル・スターバックス姫

ゲート内は11大国家が陸と海洋の9割近くを支配するが、どの国にも属さない小国も数多くある。その領地を合わせて、やっと大国家1つ分ほどの自治区を形作っていた。

もともとおれを召還したのは、く龍神を王とする鱗持つ民の国くミズマミシマだったのだが、龍神の代弁者である祀族長オトヒメが年若い少女であったためか、未熟な術式の結果、被召還者の身体はミズマミシマと関わりのない小国、スターバックスに現出した。

スターバックスは人口30万人ほどの国というよりは、われわれ現代人の感覚で言うところの「市」に近い。貴族制度は無く、王家とその縁戚者と代議士、官僚が統治するミニ行政区だった。

スターバックスに美貌の皇女あり。リリーナ姫。正しくはリリーナ・フォーミュラ・エル・スターバックス芳紀16歳の愛称が、リリーナ姫。

その可憐な姿を思い出すと、授業中の教室であるにもかかわらず顔がにやけてしまう。

その夜、平凡な高校生であるおれの前で、高貴な美姫はその柔肌を無防備にさらした。薄衣の夜着が月明かりに照らされ、下着もつけていないためにその肢体が、ほぼ全裸同然におれの目に焼き付く。

おもわず、おれはつばを飲んだ。

この時点でおれは女性経験が無かったので、初体験が異国の姫君

相手とあつては気圧されずにいられない。

リイナ姫と出会つてこのとき3ヶ月。幾度か彼女の窮地を救い、信頼を勝ち得ていたおれが彼女と親しくあることを周囲の者もとがめはしなくなつた頃だった。

「ひ、姫、ほ、本当にいいのですか」

リイナ姫がうなずく。恥ずかしいのだろう。顔を伏せてこちらを見ようとしない。

その日、く不死者たちの終わりなき遊技場と呼ばれる死霊貴族領スラヴィアの、死神モルテの力によつて生み出された死なずの者達、またの名をアンデッド軍団の侵攻を食い止め、あまつさえ不死の軍隊に完全な死を与えたおれは、スターバックスのみならず隣国領の住人たちからも英雄として崇められるようになった。

騎士団とともに凱旋したおれは道中、村人たちから熱烈な歓迎を受けつつ、スターバックス王都マキアートまで帰還した。沿道からは騎士団の先頭を進む馬上のおれに向かって、花束と歓声が浴びせられた。

宮城の前では王自らが妃と皇女を従えて、おれを出迎えてくれた。小国の善君で気さくなお方であるスターバックス王であっても、これは格別の労いだ。

おれは民衆の前で王に肩を抱かれ、王と並び立つとまるで公国の王子でもあるかのような賞賛を浴びた。

侍従が盛大な宴を催すとおれに伝えたが、固辞した。戦はこれで

終わったわけではない。すぐに軍議を開くためと言って、日頃より豪勢な食事を兵たちに与えるよう頼んだ。

本当は、敵軍を完膚なきまでに叩きのめし、国境にも警備の騎士団を置いてきたのでしばらくのんびりできるとわかっていただけたが、おれはこういふときどう振る舞えば自分の評価が高くなるかわかっていた。

おれの根城は、宮城から少し離れた区画の離宮をあてがわれていた。軍議など開かず、部下たちは町へ繰り出していった。酒場へ行ったか、女を漁りに行ったか。

給仕たちに口止めし、おれは食事をした後、果実酒をさらに果汁で割ったグラスを手にバルコニーで夜風に当たっていた。

コンコン。櫛の木の戸を拳でノックする音に振り返る。



# 2

「入れ」

顔を出したのは見慣れた女官。この人がいるということは……

おれは膝を床につき、胸に手を当てた。

部屋に入ってきたのは、ローブで顔を隠したリリーナ・フォーミ  
ユラ・エル・スターバックス皇女。

「階下で待て」

人払いをすると、彼女は顔を見せた。

「面を上げよ」

年若くとも威厳のある声に恐縮して顔を上げると、そこにいたの  
は一人の少女にすぎなかった。

「としあき卿、よく無事でもどってくれました」

「リイナ姫、だれもいませんから、トッシーでいいですよ」

「トッシー」

サファイヤブルーの宝石をはめたような瞳に涙がたまる。おれは  
すかさず彼女の脇に経ち肩に手を置く。

「わたしは皇女失格です」

「なにを馬鹿なことを。道中、騎士はみな姫様のこととて話に花を咲かせておりましたよ」

騎士だけでなく、転戦先の村人も親しく会話をするようになると、必ずリイナ姫のことを聞かれる。評判のような美姫なのかと、なにか言葉を賜うことはないのかと。

「領民を守るために戦地へ赴いた騎士団が勝利したことを喜ばなければいけないのに、わたしはあなたが無事に生きて帰ってきてくれたことだけに心を震わせているただの女です。これでは王家の一員として失格です」

「リイナ姫、おれはあなたにそう想われていることを心の糧に戦っております」

「トツシー！」

おれの胸にリイナ姫が飛び込んでくる。姫はこれまでも人目を忍んでは、たびたびおれを訪ねてきてくれた。そろそろ頃合いだろうか。

「武功を立てても、報賞も断り続けるなど、トツシーの振る舞いにわたしも父王も心苦しく想っております」

現代社会で生きてきたおれは、こういつときのように振る舞えば民衆と上官の歡心を買えるか知っている。歴史と政治から学んだ。

そして、こういつときは夜景を見ながら話をするに限る。

「姫、テラスへ」

窓を開けると町の喧噪が伝わってくる。いつもより騒がしいのは、戦勝ムードに湧いているからか。11大国家よりも小国の連合国の方が国民の暮らしは豊かなようだ。

リイナ姫の肩を抱きながら、耳元で囁くような話し方が許される程度の親密さにはすでになれている。

「姫、寒くはありませんか」

まだ秋になっただばかりで肌寒いなどということはないが、一応尋ねてみた。

リイナ姫の身長は160センチもないだろう。彼女が前髪がおれの鎖骨をくすぐる。

一度、彼女の体が離れてベランダに手を置く。

「トッシー、宴席も辞退し報賞も受け取らぬばかりでは、我ら王族の面子も立ちませぬ」

「よいのです。よいのですよ、リイナ姫。おれは民が無事に笑って暮らしていれば、それがおれにとっての勲章なのです。そしてひいては、リイナ姫をお守りすることにつながるのです」

少し強い風が吹いた。他の国の姫様はたいてい髪を腰まで長く伸ばしていることが多いが、リイナ姫の髪型は光沢のある銀髪を肩で切りそろえている。先程述べたようにサファイヤブルーの瞳から風

に乗って、しずくが宙に舞った。

「トツシー、それでもわたしはあなたに褒美を与えたいのだ。なんでもよいから申しておくれ」

「言えません」

「なぜだ」

リイナ姫が胸元で拳を握る。

「口にするのも、あまりにおそれおおいので」

「よい。申しておくれ。遠慮はいらぬ」

「とても、とても申せませぬ」

おれは顔を覆うふりして、指の隙間から姫の表情を伺った。姫の容貌は日本人から見ると、西洋人を通り越してももうハーフエルフかと見まごう神秘的な姿だった。

姫はハラハラした様子でおれに願いを言えと迫るが、これがまたなんと外見に似合わぬコミカルさで可愛らしい。

彼女はおれがなにか苦悩を抱えて、苦悶の表情を隠しているのだと思っっているが、逆だった。おれの顔はデレデレでとても見せられたものではないのだ。

「リイナ姫、願いを申したら聞き入れてもらえますか？」

「もちろんだ」

「本当ですか？」

「皇女に二言はない」

「もしかしたら姫を怒らせるかもしれないよ？」

「かまわぬ。申してみよ」

「では……」

おもむろにおれは、リイナ姫の背中まで両手を回し、その身体を捉えた。

「！ としあき卿、なにを？」

「姫、褒美をいただけるのならわたしは望みは姫ご自身です」

リイナ姫は言葉もない。ただ吐息が漏れた。おれの胸板が彼女の身体に密着する。一条の稻妻がリイナの身体を駆け抜けていった。ビクンと肩がはいれんしたかと思うと、がくつと力が抜けて、まるで操り糸の切れた人形のように、おれの腕の中で動けなくなっていた。

炎のような期待感がおれのなかで燃え上がる。

皇女を想いのままにもてあそんでいるかのように見えるだろうが、このときおれはまだ女性経験がない。

おれはおれなりに使命感を持って生きているつもりだが、彼女に  
はじめて会ったときからこの日が来るのを待ちわびていなかったか  
といえは嘘になる。

「姫、はじめてお目にかかったときから、おれは、おれはもう！」

この世界で根無し草のおれは、周囲の信頼を得るべく紳士的に振  
舞ってきたが、もはや限界だ。

おれは鼻息荒く姫の唇を奪おうとする。

「ヒイツ！」

おれの豹変に姫の顔色が変わった。

「ち、ちょっととしあき卿、ま、待って」

おれが唇を突き出して、姫のそれをふさごうとするのを彼女は細  
い腕でおれの顔を押しのけようとする。これはちょっと意外だった。  
ここへ来たときには、もう完全に覚悟を決められているのだと半ば  
感じていたのだが。

「い、いやですか、姫様？」

「え、そういうわけでは」

「じゃあ、続きを」

「ま、待って、まだ心の準備が」

「皇女に一言はないと言ったじゃないですかー、やだー」

唇に姫の指の感触。

「1分！ わたしに1分時間をくださいー！」

両の掌で必死にガードしながら、思い切りのけぞっておれの顔をか  
わす。おれが手を離すと、彼女はバルコニーに手を置いて深く呼  
吸した。

「……」

呼吸を整えたリイナ姫は、振り返ってその両腕を広げた。



「さあ、どうぞ。トッシー卿、遠慮なく」

おれはその腰に手を回すが彼女は緊張しているのか、ぎゅっと目を閉じてあごを上に向けている。

彼女の顔におれの息がかかって、皇女の肩がびくと動いた。

(今度こそ、今度こそ！)

もう二人を遮るものはない。身分の差もこれだけ武勲を立てれば、障害にならぬであろう。

(やわらかい、そしてつややかな、さすが王族の唇)

逆に自分の肌のささくれを感じさせるほどの、なめらかな感覚がおれの唇に返ってきた。

リイナ姫の唇は小さく、強く押し付ければおれの口に飲み込まれしまいそうな薄さ。

ぎゅっと、姫の手がおれの肩の衣を掴む。おれは彼女の身体を締め上げぬよう、腰に回した手に力を入れないように気をつけた。

1分近くそうしていたが、姫が窒息してしまいそうなので一度離れる。

「ぶっ、はあ」

苦しそつに息を吐き出す彼女。もたれるように頬を俺の胸の埋めた。

「トツシー、わたしは、わたしは少し怖い。このようなこと、初めてなのだ」

これから起きることを思うと、彼女が怖じ気づくのは仕方ない。不死者の暴徒に御者を囲まれたときも気丈に振る舞っていた皇女だが、それでもはじめての性体験の前には、だれしも恐ろしさに身がすくむものだ。

逆に「オツケー、トツシー。わたしは経験豊富だからバツチコイだ」と言われては堪らない。

「リイナ姫、わたしは謀反人でしょうか。あまりにも畏れ多いことをしていることは重々承知しています……ですが」

「と、としあき殿！ 手、手が！！」

「えっ？」

掌にやわらかい感触。女性としてはかなりスレンダーなタイプに属する姫だから、けっしてたわわな感触とはいかないが、貧乳であれ、やはりおっぱいの感触は最高だ。

「うおー、こ、これは失礼を！！」

かしまった口調とは裏腹におれの掌はリイナ姫の右の乳房を包んでいた。右腕はおれの意思に反してその場所から離れようとしな

い。仕方なく左手でその手を引き離した。

彼女は身体を折っていまにも泣き出しそうだ。おれはじっと手を見る。青林檎のようなまだ硬い発展途上の乳房。声なき抗議をするかのような潤んだ瞳。

バルコニーに並んで夜景を眺めた、さきほど抱擁する前に見つめた瞳も、ロマンティックに濡れた双眸だったが、いまのそれはもういかにも「わたし、もうこれがイッパイイッパイなの」という心持ちを現していた。

そしておれの頭の中もまた、おっぱいのことでおっパイオっパイ……もといッパイイッパイなのだった。

「グス……」

姫が涙をぬぐって向き直る。

「リイナ……」

「夜着にかえて参ります」

おれは窓を閉め、部屋の灯りを消した。姫は隣の部屋へと消える。もともとは王族の離宮で彼女の着替えも揃っていた。

（姫、無理をしているなー）

おれもブーツを脱いで、軍服のトラウザーズとシャツをたたんだ。士官からバカにされるが、シャツの下にはもう一枚下着を着る習慣を変えていない。

ベッドの上で正座のままシャツを折っているおれの背後から声がした。

「としあき卿」

(キ、キタ

(。 。 )

!!!!!!)

「リリーナ・フォーミュラ殿下、とてもキレイだ」

もじもじと身体をくねらせながら、カーテンの陰に隠れようとする姫におれは近づいた。

手を引くと、まるで体重のない精霊の手を引いているように身が軽い。

カーテンから離れて、月明かりが差し込む窓辺にそのシルエットを照らす。絹のネグリジエに包まれた白い肌が宝石のように神々しい輝きを放っている。

「姫、手を下ろして」

おれに命じられるまま、ふるふるとブラジャーに隠されていない乳房から手をどける。

お椀ほどもない、砂丘のようななだらかなふくらみだったが、初体験のおれには、むしろ似つかわしいだろう。なんとか不安のないように姫をリードしてさしあげたい。

おれの目線の方が高いので、こうして向き合っていると捕虜を処分しているような気まずさがただよってしまふ。

「リイナ、こちらへ」

ほっそりとした肩を抱いてベッドに導くと彼女は、するりとシーツの中に身を隠した。

「明かりを、もそつと暗く……」

おれはカーテンを閉めた。電灯もないから、部屋は月明かりが数条差し込むだけで青暗の闇に包まれた。

おれは目がいい方なので、すぐに闇のなかでも視野がもどる。

「姫、隣へ入りますよ」

「……参れ」

おれは吹き出しそうになる。皇女からすれば、男女の和合も武人にとっての初戦のようなものなのかもしれない。

（おっと）

声が漏れないように唇を閉じ、彼女の隣に侵入する。

「不思議な……気持ちです」

彼女の言いたいことはなんとなくわかる。

「いままで人目を忍んでお逢いしていましたが、とうとう一線を越えることになりましたね」

異界の迷い人だったおれの水先案内役を引き受けてくれたリリーナ。貴族でもない、どこの馬の骨ともわからぬおれと親しく接してくれた。

「あなたとは良き友人になりたいと思っていました。なのに、逢うたびにそれ以上の感情がわたしのなかで育っていくのです」

「おれは友だちでありつづけたと思ったことは一度もありません」

「え？」

悲しそうな顔で姫が振り返る。

「ずっと友だちなんて嫌です。姫が時おり陣中見舞いに来てくれたときも常にわたしは、どうやったらあなたの心を自分のものにできるか考えていました」

おれは姫の身体に体重をかけぬよう手とひざについて、彼女にまがった。シーツは上等なもので、つるつとした感触でおれの背中を滑り落ちていく。

「夜着を脱がさせていただきます」

ビリッ。(あっ、いっけね)彼女のネグリジエを破いてしまった。

(ええい、かまうもんか)おれは自分の肌着を脱ぎ捨てベッドの外に放る。

こうして一糸まとわぬ男女の裸身だけが闇のなかに現れた。

姫は唇を噛んで恥ずかしさに耐えているようだ。右の腕で胸元を隠しているが、左手は観念したように投げ出されている。

その手がおれの頬に触れ、それから首筋を這い胸元に触れる。



「意外と柔らかかな肌なのね。もつとささくれた感触かと思っ  
ていました」

現代人の生活に慣れた俺の肌は、この地方の人間ほど荒れてい  
ない。それでも辺境での戦を繰り返して日と乾燥に焼かれた方だが。

「そばで肌を見るのは二度目」

城内でおれが半裸で稽古しているところへ、姫がやって来たこ  
とがある。

彼女は俺の身体を見て驚いていた。

「傷を受けたあとがまったくないな。そなたのような強者は、不  
覚をとったことがまるでないのか？」

おれは、傷が治りやすい体質なのだと答えた。常人なら医師に縫  
合を頼むような負傷でも、一晩も経たずに跡形もなく治ってしまう  
のだ。

おれの下で仰向けになっている乳房はもとから小ぶりなので、重  
力の方向が変わっても形の変わることがない。

もつ無言で、ゆっくりとだが遠慮もなくそのふくらみに手をかけ  
た。

「あっ！……あっ」

リイナ姫の声もか細くなっていく。

こういうときどんな順番で女性を喜ばせたらいいのか、おれにはわからないが、今夜この瞬間はリリーナ皇女がおれへと与えた褒賞なのだとその想いに甘えることにした。

彼女の首筋に唇を這わせる。

「ふゆうっ、あ」

くすぐったいのだろう。身体が硬直し、顔が左上部に振られる。

おれは視線を真ん前に向ける。おれの掌の中、指の間、ささやかな曲線の頂上にはさくらんぼのような赤みがちょこんとかわいらしく息づいている。

唇で果実をはさむと、「ヒッ」という甲高い声が漏れ、彼女の両手が、右手でおれの頭を抱き、左手でおれの口を敏感な部分から引き離そうと力を加えていた。

ウォーリアーの鋼鉄の身体を押しのけるのは女性の力ではまず無理だ。おれはおかまいなしに、このときばかりはまるでこの土地の貴族のように葡萄のふさを舌で転がすのであった。

なにぶん童貞なので全身の隅々まで攻めるような連鎖的愛撫も思いつかず、そのときの俺の手は皇女の胸とお尻を往復するばかりの単調な動きしかしない。

人間の肉体は強い刺激にもやがて慣れる。羞恥心にも免疫ができ

てきたのか、姫の身体からも緊張がほぐれてきたようだ。

「はあっ、はあっ……」

リイナ姫の熱い吐息が耳にかかる。相当な熱量がこもっている。顔だけでなく、まるで風邪でもひいているかのように、全身が暖かくなっている。

おれの視線は、姫の首筋を見つめる位置にあった。

不意に彼女は上半身を起こした。

(どうした?)

皇女は、おれの首に手を回して顔を近づけた。潤んだ瞳、せつなげな吐息。その口元が一瞬、きゅっと結ばれる。

カッンという硬い音がしたのは、おれと彼女の歯がぶつかったときだ。今度は姫の方からの熱い口づけ。

「んんっつ、むぐう」

姫もなかなか情熱的なところがあるようだ。

彼女に舌を搦めるようなテクニックはないと思うが、強く口と口が接すると少し呼吸をしただけでも舌が触れる。

「……！」

「……！」

そのことに気づいた姫がぱつと顔を離し、思わず口を手で押える。

まだまだ恥じらいが強いようで、おれの興奮は逆に高まるばかりだ。

「姫、もう一度よろしいか」

姫は首を横に振る。

(そんな、つれない)

「姫ではありません。いまはただの……なんというのでしょうか」

もじもじと胸の前で指を合わせている。

(ああ、そういうことですか)

コホン。咳払いをひとつ。あらたまつては、おれも呼びづらいのだ。

「リリーナ、あなたはいますターバックス国ではなく、おれだけのプリンセスだ」

「トッシー」

そう。いまのおれと彼女は、皇女と騎士団筆頭騎士ではなく、ただの恋する男女に過ぎない。

こんどはおれの方から唇を。童貞ではあるがキスの経験ぐらいはあるので、ディープに彼女の唇、それから舌を吸った。

「なにか、すごく凶暴な感じがします」

そうかもしれない。胸を玩ばれるより、舌同士の感覚は鋭敏だ。「キスでとろける」なんてフレーズもあるぐらいだし。

リリーナは深いため息のような深呼吸をひとつした。

「慣れているのね」

自分ではむしろ奥手だと思うのだが、純潔の乙女からしたら経験豊富なプレイボーイに見えるようだ。

「そんなこと……ないよ」

「でも、あなたの周りにはたくさん女性の」

「たくさん？ だれのことですか」

「エイプリルやミサキたちがいつもあなたのそばに」

エイプリルは別の国に召還されたアメリカ人の女の子だ。敵の戦力として十分な教育を受ける前に、一手先んじてこちらの陣営に引き入れることが出来た。

「あいつは副官だし、おれのことをそんな目で見ていませんよ」

エイプリルはおれの副官ということになっているが、マイペースでおれの部下という感じもしない。ゲートの外の間人が数少ないから、おれに愚痴を言っただけだ。

『としあき、早く戻れるようになんとかしろ』

向こう側に帰りたいのは当たり前だろうが、彼女はいつもおれをせつつく。

彼女をこちらの陣営に引っ張り込もうと口説くときに、「元の世界に帰りたいだろう？」と散々心を揺さぶったので、おれは彼女に地球帰還の義務を負うような形になってしまった。そのかわり、彼女も特殊能力を駆使して、おれの軍隊への貢献度も高い。

姫の言葉にもどるが、

「わたしの父もそうですが、地位の高い男はいろいろと方々に女性を囲うものが多いとも聞いていますし。まして、あなたはどこへ赴いても英雄として……」

(「英雄、色を好む」ということを言いたいのかな。まあ、文明度からみても封建的な世の中だよな、こっちは)

温和で話の通じるスタバ王だが、それでもまあ、前時代的な父権をかざしているように見える。

おれは一応救国の英雄ということで広く知られていた。噂と評判が人づてに広まっているようだ。だから、遠征先でもやりたい放題

だろつと、姫は諦観しているようだ。

## #7 (後書き)

日刊ランキングにのったらどれだけアクセスが増えるのだろう  
軽い気持ちで評価点入れてみないか？ (チラツ)



だが、実はそんなこともないのだ。実際、他国の領主に饗応を受けることもあり、気を利かせて美女を侍らしておれをもてなしてくれたこともあった。

正直、ふらふらと誘惑に流されてしまふところだったが、おれのそばには常に前述の女騎士エイプリルや、おれといっしょに地球から巻き込まれ召還した少女、美咲がいて、おれがハニートラップにかかりそうになるとおれの耳を引っ張って耳もとでわめき散らのだ。「あんだね、なに鼻の下のばしてんのよ。こんなのに決まってる。だいたいあんな色仕掛けの宴会に同席させるなんて美咲の、子どもの教育に良くないでしょうが！」

美咲はまだ小学校に上がったばかりの女児だ。ここではおれしか頼れる者がいない。

こんな調子でいろいろ監視が厳しいために、おれだって本当は色に溺れたかつたんだが、いまのところ清廉潔白を貫いている。

まあ、それがおれの良い評判になって民衆から慕われる一因にもなっているのだから悪いことではないのだが。

「ときにとしあき卿、いかがですか。今宵は英気を養っては」

地方の公爵や、やり手の商人には、日本風に言つと「ガツハツハなおっさん」が多くいて、純粹に厚意と労いで夜伽よこを勧めてくれることもあった。

宿で待っていていれば女性が訪ねて来たのだろうが。こういうチャンスもことごとくエイプリルがたたきつぶした。

「我らは矛を持たぬ民の盾。女に現うつを抜かしている暇いとなどない！」

エイプリルが剣を掲げ高らかに宣言する。周囲は感心しきり。おれはがっかり。

「そうだよな、リーダー！」

冷たい目線でエイプリルがおれに釘を刺す。

「うん……そうだね」

こんな調子だから、リリーナ皇女が心配しているようなことはまだ起きてない。

「トツシー、いいのですよ、本当のことを言っても。そうだとしても、わたしは責めたりしません」

「ほんとうになにもないんです」

無理矢理でも清廉潔白に振る舞わされているので、出会う土地の者たちはおれを枢機卿かと思ひ込む者までいたぐらいだ。そうでなくともおれをテンプルナイトか僧兵だと思っている人間が多かった。

「本当？」

姫は半信半疑のようだ。おれは二度うなずく。(結果的にだけど)

「にわかには、信じられませぬ」

(無理からぬ。結果論だからね。チャンスはたくさんあったし)

思い出すだにいまましいエイプリルの所行。

(でも、姫さま、あなたと民をお守りしたいと思って戦っているのは本心ですよ)

おれは最上の笑みを作って親指を立てた。ビシッ。

「童貞も守れないような男に、何が守れるというのですか!」(ドヤー)

ビュースとすきま風。

(あ、これ、はずしたな……)と思ったのも束の間。

## 第二章 義妹と女教師とおれの過去

「キヤー、としあきー、抱いてー!!--」

感激した姫がおれにタックルして、おれたちはぐるぐるとベッドの上を転げまわった。

「はあはあはあ、としあき、もうわたしも恐れませぬ」

壁は崩れ、あとは若い情熱をぶつけ合うのみ。

「痛い!!--」

姫が思わず跳ね起きる。

(あちやー、やっぱりそうかー)

「でも耐えます! あなたの戦の痛みに比べればこれしきの」と……」

(なんでいじましいんだ)

おれはいつそう彼女のことを愛しく思うのだった。

次からはきつと、うまくいくだろう。

リリーナ・フォーミュラ・エル・スターバックス姫とのことは心残りだったが、おれは地球に帰って来た。

もちろん、ゲート内世界が抱えるすべての問題を解決してからのことだ。

おれにはどうしても、この世界にもどらなければならぬ理由があった。

リリーナ皇女は泣いておれを引き止めた。

おれもつらかった。

おれはこつちの世界では、あれだけの美人に好意をもたれたことはおろか、ステディな彼女すらいた試しがない。

「行かないでおくれ、としあき」

おれの二の腕にしがみついて、ぎゅうぎゅうとおれの身体を抱きしめてくれた。

サファイヤブルーの瞳から、青真珠のような涙がこぼれる。

その美貌を思い出さない日はない。それどころかこうして授業や休み時間ごとに想い出している。

「ああ、リリーナ。またすぐにもゲートの中にもどりたい……」

そんな夢想到に浸っていると、クラスメイトたちのざわつく声が聞こえて来た。

「なんだ？」

教壇にはいつもの担任教師、それと見知らぬ女性教師が立っていた。年齢は若い。ベージュのスーツに薄い紺色のブラウスを着ている。髪も染めていない、真面目そうな印象の女性。

「えー……今日から三週間……大学の……教育実習……」

担任教師に紹介されたのは、新しい教師ではなく、教員免許を取得しようとする女子大生だった。

「うおー、かわえー」

「ひゅーひゅー」

男子生徒から上がる歓声。女子も珍しい客人に、大いにはしゃいでいるようだ。

短い紹介を終えると、担任教師は教室を出て行った。

（あれ、どこかで見たような顔の希ガス……）

白墨が黒板をこする音。

「中原涼子」、それが彼女の名前だった。

（はっ！）おれは思い出した。おれは彼女を知っている。

（これは……まずいんでないかい？）

彼女もおれを知っている。でも、おれのことをもう覚えていないかもしれない。ほんの短い間、同じ場所にいただけだから。

## 第二章 義妹と女教師とおれの過去（後書き）

ひ、評価ポイントえエエ

彼女は自己紹介で、大学の四年生で外国語学部の学生だと言っている。中学高校の教員免許は通っている大学の学部で取得できる教科が異なる。

彼女は英語教師になりたいのだという。

(……気づきませんように……)

ふつう、授業のたびに出欠はとらないが、はじめての授業ということで彼女は出席簿の名前を読み出した。

(あときは、ちがう名前だったけど)

中原先生は、ひとりひとりを起立させて名前と顔を覚えようとしているみたいだ。

「北佐和くん」

「はい」

「塚原さん」

「はい」

「藍川くん」

「うーっす」



うちのクラス連中も行儀がいいのか、わざわざ起立して返事をしている。その都度、中原先生がまじまじと生徒の顔を見つめている。

やがておれの番が回って来た。

「双葉……ふたばとしあきくん！」

調子が出てきたのか、教室の空気になじんできたのか、やたら快活な口調でおれの名を呼ぶ涼子先生。

(なんだか、小学校の教育実習みたいだ)

おれは、なるべく彼女と目を合わさないように、やる気のない生徒をよそおってうつむき加減に起立した。

「ウウエーイ ( o w o ) 」

「じゃ、真面目に返事なさい！」

「は、はい……」

(やば、センサーが近づいてくる)

中原先生は、おれの右斜め前に立った。おれは校庭の方に視線を避けた。彼女は二、三度出席簿とこちらを交互にうかがった。

「先生の方を向きなさい」

「…… ( o ) ( チラッ

—— ( )

ササッ

—— )

） 3

おれは一瞬だけ先生の方を見た。

「……」

中原さんはいぶかしげに腕組みしている。

「……」

「ねえ」

「……はい」

「どこかで、あなたと会ったことないかしら？」

「いえ、ないと思います」（キツパリ）

ポーカーフェイスで答える。

「気のせいかしら？」

「ですね」（にっこり自然な笑みで）

涼子は、ためいきを一つ吐いた。

「座っていいわよ」

おれは着席した。やれやれ。

教室が少しざわついてきた。周囲からしたら奇異なやり取りだから仕方あるまい。

「先生、どうしたんですか？」

一人の女子生徒が挙手して質問する。

(いらぬことを！)

また中原先生も、いい笑顔で答える。

「先生が高校生のときの同級生に似てたから、ついね」

どつと教室が湧く。ヒューヒュー。誰かが口笛を吹いて囃し立てる。

(うぜーぞ、ガキども！)

また、別の女子生徒が追い打ちを掛ける。

「えーなんでー？ その人のこと好きだったんですかー？」

(やめろって、まじで)

中学生高校生はこういう話大好きなんだよな。

「うーん、そうねー。実は、ちょっといいなって思ったのよね。ちよつとの間だけ同じクラスで、その人すぐ転校しちゃったんだけどね」

（また、あんたもいちいち話を合わせなくていいッて）

「もしかして同一人物だったりしてー」

中原が苦笑する。

「もしそうだったら、落第何年生？　ありえないわよー」

#3

この問いには、クラス一同だれも笑ってない。

「えー？ だって、ねえ」

「うん」

「だよな」

数名の生徒が顔を見合わせた後に、おれの方を向く。それに釣られてクラス全員の首が動いた。

「うっ」

まずい展開だ。

「だって、とつしーは留年大王だしー。たしか先生と同じ年ぐらいじゃなかった？」

（、（O W O ; ; ）ノ      オンドウルル      オンドウルルラギッタン  
ディスクー！）

とうとう確信に近づいてしまった。

「え、留年…… 大王って…… そうなの？ 双葉くん」

「だれが留年大王ですか、だれが滝沢秀明ですか」

「滝沢秀明はだれも言っていないでしょ」

（自分ではちょっと似てると思ってるんだけど）

先生「……」

おれ「……留年は一回しかしてませんよ」

「あら、そうなの」

クラスの連中は無責任なことばかり言う。たしかにおれはいま一歳だが、留年はゲートの中にいた一年分だけだ。

「一度社会人になって、それから高校に入り直したんです」

「ごめんなさい、無神経なこと言ったわね」

「それはいいけど、そろそろ授業はじめた方がいいんじゃないですか？」

涼子は時計を見て、顔色を変えた。

「いつけない、もう10分も経ってる」

教育実習生も期間内にノルマの授業をこなさなければ、教員免許を取得するための単位がもらえなくなるはずだ。

「コホン」

姿勢を正し、咳払いを一つして彼女は授業を開始した。

「じゃ、あらためて。実習が終わるまでの間、よろしくお願いします。では、教科書の30ページから、文型の区分についていくつかの例を示します。」

1. You must come back before dinner.

2. You look great in your new dress.

3. He quickly finished a few math problems.

4. She brought me some CDs.

5. She painted the table red.

教科書の例文の中から、それぞれの文と同じ文型の文を選んでください。

まず、1番の例文から探しましょう

生徒に与えられた時間は一分だった。

「1. You must come back before dinner.」

これに該当する構文を答えてください。

では、双葉くん？」

おれは立ち上がり、答える。

「選択肢c。『The basketball game starts at four this afternoon.』」

「はい、正解です。同じ答えだった人、手を上げて」

おずおずと数人の手が挙がる。気恥ずかしくて反応しなかった者もいただろう。

「では、『2. You look great in your new dress.』の答えを考えて」

また一分が過ぎた頃、先生は生徒の席の間を歩きながら、一人の生徒の前で立ち止まった。

「はい、どうだったかな、双葉くん？」

（またおれかよー！）



# 4

ふたたび指名されたおれは、また正答した。

「bの『You should always keep you  
r room clean.』です」

このあたりから、おれも正解が曖昧になってきた。

「3. He quickly finished a few  
math problems.」

ここからは30秒の時間しか与えられなかったが、やはり特定の生徒が回答を求められた。

教室の生徒も違和感を抱き始めた。

「『e  
I'll always remember that wond  
erful day.  
です」

「他に正解だった人は？」

先生は、少し嬉しそうに微笑んでいた。

( ) どんだけ意識してるんだよ

みんなも同じ事を考えているはずだが、彼女自身はかまうことな

く、質問を続ける。

「4. She brought me some CDs.  
の答えは、『a、  
The sun gives us light.」

残された選択肢は一つ。

「5. She painted the table.  
と同じ構文は、『I want to be honest.  
stily』」

「はい、よくできました。全部正解できてたら、英語の構文を理解できていることになります。双葉くん、どのように構文を区別したか説明してください」

そこからは、授業の半分をおれが行っているようなものだった。

「えーと、例文の5文は順番を変えて、それぞれ英文における基本の5文型に副詞句を加えています。」

- 1 主語 + 動詞
- 2 主語 + 動詞 + 補語
- 3 主語 + 動詞 + 目的語
- 4 主語 + 動詞 + 間接目的語 + 直接目的語
- 5 主語 + 動詞 + 目的語 + 補語

これと同じ構文になる選択肢を見分ける手順で区別しました。

まず文章から主語と動詞を探します。これで構文のSとVが埋まるので、その他の単語を補語と目的語に分別します。

文の前後の『時、場所、様子』を表す語句を副詞句として、選択肢にある文章をS・V・O・Cに置き換えた構文として考えます」

迷うのは目的語と補語の区別だ。

「例文と選択肢はみなさんを惑わせるために、副詞句の数が一致していないものもありますが、文章の構成としては同じものになります。」

目的語と副詞の区別は、論理的にはVの後ろにある語句と、その前方に有る名詞との間に、『aはbだ』『aがbする』という意味が成り立つ場合には目的語、そうでない場合は補語になります」

アメリカ人はべつに自分たちの言葉をいちいち分解して、構文を意識しながらしゃべったり聞いたりすることはないだろう。

「言葉というものは、もともと学問ではなく道具であり、学問やビジネスを英語で行うためには、構文を意識する事無く自由に使えてこそコミュニケーションツールではあります。ですので、会話や英作文を日本語のように使えるようになるためには、暗記するよりも英語に慣れる、馴染むぐらいに、見る聞く書くと、なるべく五感を駆使した学習が必要になります」

授業が終わると、やはり中原先生はおれに向けて、ちらちらと視線を送りながら、去って行った。

昼休みであるが、授業が終わってもクラスメイトたちの好奇の視線がチチラチラと浴びせられている。

「じー」

隣の席の女子生徒が、無遠慮な視線を投げかけてくる。

「なんだい？ 吉岡さん」

「先生と知り合いなの？」

他の生徒は、おれと目が合いそうになると、ささっと目線はずすが、彼女は遠慮がない。

「ちがうよ」

「中原さんの好みのタイプなのかしら、双葉さん」

「かもしれないね」

「チャンスなんじゃない？」

「ははは（苦笑）」

「おつきあいを考えてみてはいかがかしら」

なにを思っ、吉岡がこんなことをけしかけてくるのかはわかっ

ている。

「いいねー、教師と生徒の禁断の恋愛ってか」

「わたし、携帯小説家になりたいの」

「知ってるよ。いつも携帯でなにか文章を打ち込んでるよな」

「読者受けしそうな題材だわ。先生とおつき合いできたら、取材させてよ」

「ごめんこうむる。それに涼……先生とはなんの関係もない」

おれの恋愛経験はあまり携帯小説の女性読者向きではないと思うのだが。

「ファンタジー小説を書く気はないか？」

それなら協力できないこともないが、でもそっちは供給先が別にあるのでやはり吉岡にネタを提供することはできないな。

「ファンタジー小説？ あんな超次元ゲートが目の前にあっちゃね、もう空想の入る余地がないわ」

吉岡は窓の外を見た。

都立吉上高校のグラウンドは消失し、いまは異世界への出入り口になっている。イレヴンズゲートと呼ばれるのは世界に十一ヶ所存在し、基本的にはゲートの出入り口が存在する国家が、両世界の通行を管理をしているが、地球側の一部情勢不安な地域や極地などは

国連が管理する例外もある。

いまでも、異世界を見聞したいという勇氣ある市民が千人ほど列を成して通関の順番待ちをしている。

そのため、グラウンドを使えなくなった生徒たちのために、体育授業や部活動は少し離れた市営体育館を吉上高校専用体育館として使用することが認められた。

「そうかもしれないね」

ゲートの向こう側では、かつてのおれの部下たちが、地球人の入国審査を行っていると言吉岡に話すことはできない。

「さて、昼飯だな」

「また、先輩がいらっしやいますね」

「ん？ ああ、そうだな」

吉岡の言う「先輩」とは……ちょうど現れたようだ。ここは携帯小説家志望の吉岡がはじめて彼女を目にしたときの描写に読者のみなさんへの説明を譲ることにしよう。

吉岡がなにか言いかけて止まった。クラスのほかのみんなもゆっくりと一方向へ振り返ってゆく。

「彼女」がはじめてこの教室に姿を見せたとき、

「？」

みんなの視線を追うと、教室の後方の扉が開いていた。わたしと双葉としあきの席は一番後ろの列にあるので、右方向に首を曲げる向きになった。

そして、そこに「あのひと」が立っていた。まるで漫画の中の登場人物に見えた。

まるでアニメーション番組の1シーンか何かのように、比喻でもなく彼女はそこに描かれていた。

まず、日本人形のような漆黒のロングヘアに目を奪われた。

神職を思わせる神々しさを放つなら巫女と表現すべきかもしれないが、日本人らしからぬのは、吸いこまれてしまいそうになるほど美しい双眸だった。宝石のように輝いている。

さりとして、近寄りがたい威厳を放っているわけでは決してなく、むしろ保母さんのような温かな笑みをたたえ、教室の空気は艶やかになってゆく。

なんのアクセサリーも、ピアスはおろか、ヘアバンドすらもつけていない。化粧をしている様子も無い。制服は、わが校のオーソドックスなセーラー服だが、たとえジャージの上下を着けていても、その異彩は衰えることなどないだろう。

人形のような顔立ちだが、けっして不健康そうな色白の肌ではなく、冴え冴えした白さにほんのわずかだけ、ピンク色の頬。照度の暗いところならば、眼を凝らさなければ気づかないだろう、デリケートな配色。

男子たちは呼吸するのも忘れているかのようになり、無言で彼女を見つめている。

そんな無遠慮な視線には馴れているのか、表情一つ変えずに彼女は、こちらへ歩いてくる。

(こっちへ?)



教室の後方を足音も無く歩く。スラツと長い手足も、わずかになびく長い髪も、女子にしては少し背が高く、それでいて細い身体つきも、何もかもがカッコ良い。クラス中の視線が監視カメラのように彼女を追う。確かに、これでは「こっち見んな」という方が無理だ。

もうすでに彼女は、わたしの二歩前に来ている。この方向にはわたしともう一名しかいない。

(え、あたしに用?)

と思つたら、わたしの脇を抜いてもう一步前へ。わたしの後ろにはもう一名しかいない。

「忘れものよ」

彼女の楽しげに弾む声を聞いた。そんな彼女の表情を、肩を震わせる愛らしい仕事を、わたしはチラリと見ることに成功する。

「ああ、すまないね。サツキ」

彼女はそつと手首をもちあげる。その指には弁当箱の包み。

「そついえば……」

双葉としあきは社会人学生でかつ、いつも弁当を持参していた。男だてらにまめなことだと感心したものだ。それがだれか女性の手によるものだとは思ってもよらなかった。

「……双葉先輩」

二人を見て、教室の中には何ごとかを囁き合っている者もいた。

「知ってるのか？」

「ああ、三年のフロアまでちょっと見学に行ったんだ。ほら、ウチの三年に半端じゃない美人がいるってウワサがあつたらー！」

勇猛果敢に聖域に侵入した勇者がいたようだ。男子生徒の好奇心、悔りがたし。

その噂の主が彼女であることは、確かめるまでもない。

(それにしても、入学してそれほど経つわけでもないのに、なぜ双葉としあきは上級生の美少女とかかわりを持っているのだろう。しかも弁当の差し入れなんて!?)

しかし、そのときわたしはある事実気付いた。なぜ、もっと早く気付かなかつたのだろう。

(あれ、待てよ。双葉としあき……双葉サツキ……、サツキ……先輩!?)

と、まあ、最初に我が妹を紹介したときは、吉岡もたいそう驚いていたようだ。

「兄さん、いつしよにお昼を食べない？」

なんとも奇妙な話に聞こえるだろうが、同じ学校に通いながら、妹のサツキがおれの上級生なのである。

「そうすることにしよう。屋上でも行くか」

クラス中の注目を集めながら、上級生がいつしよに教室で食事するのも、上級生下級生双方が食べづらいだろう。

おれは席を立った。廊下に出ると、屋上に続く階段へ歩き出す。

向かう先は廊下の一番突き当たりだ。

「おい、そんなにくつつくなよ、恥ずかしいじゃないか」

サツキの肩がおれの上腕に触れるほど、ぴたりと密接して歩いている。

「そんなこと気にするなんて、おかしいの」

彼女が楽しそうに笑う。ころころと弾けそうなほど明るい笑顔だ。

廊下を歩く彼女を目にしたすべての生徒が、無意識に彼女が振りまく、色彩の柔らかさに照らされる。

並んで歩く二人は、兄妹というよりまるで恋人同士のように……  
見えないな、やっぱり。

もうすぐ六月だ。梅雨になれば、屋上のベンチで食事をできる日は少なくなるだろう。昼休みにまっすぐここへ来た数名の生徒が、すでにそれぞれの弁当の包みを開いている。

おれたちは、転落防止用のフェンスを背にするかたちで同じベンチに座った。

「はい、兄さん」

サツキがサンドイッチをワンピース、おれの口元に運ぶ。

「……」

対面には男子生徒の三人組がこちらを、どこか呆れたように見ている。

(うつつ、恥ずかしい)

おれはサツキの手からパンを取ると、それを自分の手であらためて口に入れる。あまりにもおれたち二人の佇まいは違い過ぎて、周囲の人間はおなじ環境の中にイメージが結びつかない。

『妹さん、すごい美人ですね』

よく言われることだ。その後に必ずこうも言われる。

『似てませんね』

そりゃ、そうだ。血がつながってない義兄妹だから。

彼女と兄妹になって、もう何年経つだろうか。はじめて出会ったのはおれが一二歳でサツキが九歳だったはず。

おれが親父に引き取られてからすぐ、というより初対面の瞬間から、サツキはおれになついた。

「兄さん、クリームソースがほっぺについてる」

「うん？」 サンドイッチからはみ出したサワーソースの感触。

「ペろっ」それを小さな感触が、温かくて濡れた舌がなめとった。

「ひゃああっっ」

おれは思わず乙女のような声を漏らす。

「うふふふ」

サツキは、以前からお兄ちゃん子だったのだが、おれが一年の間ゲートの中にいて離ればなれだったこともあって、最近は行動がエスカレートしてきている。

「おまえなー、家の外では控えろって言ったろ」

「うふふふふ」おれがゲートから帰還してからは、基本的にはいつも上機嫌の妹である。

おれたちの異常な仲の良さが、学校内でも噂になりつつあるのは  
自覚しているのだが、妹はまるで気にしていないようだ。

バタツ。牛乳パックの地面に落ちる音。おれたちのものではない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0162w/>

---

異界嫁日記

2011年10月30日00時27分発行